

# 子規會誌

一一二六号

平成二十二年  
七月

平成二十二年度總會について ..... 松山子規會事務局 ..... 一

小山家の人々〜大原家・子規との関わり〜 ..... 渡部平人 ..... 五

服部嘉修先生追悼 ..... 和田克司 ..... 二四

書評 山上次郎著『子規の書画 新訂増補版』（二玄社刊） ..... 編集部 ..... 二六

書評 谷光隆著 考証『子規と松山』（シード書房刊） ..... 和田克司ほか ..... 二八

計報 ..... 編集部 ..... 三二

平成二十年度正岡子規ほか研究資料・文献目録 ..... 松山市立子規記念博物館 ..... 三三

## 例会 記録

### ○平成二二年四月例会（第八〇七回）・総会

四月二〇日（火） 子規記念博物館 出席者 四四名

講演「愚陀仏庵の時期における子規、漱石の転機」

副会長 和田 克司氏

大島梅屋所蔵『頼祭書屋俳話』関連の子規自筆稿は、子規が愚陀仏庵で、松風会会員や漱石に説明しながら書いたもので、子規自身が新しい文学の可能性を見いだしたことを具体的に説明したものである。また、子規自筆の『承露盤』の解析により、明治二八年九月二〇日前後の子規と漱石の足跡が明らかになった。

### ○平成二二年五月例会（第八〇八回）

五月一九日（水） 正宗寺本堂 出席者 三五名

講演「子規と清国」

副会長 和田 克司氏

子規の遼東半島従軍ルポルタージュを通じ、散文、俳句、和歌、漢詩、新体詩を総合的に組み立てる子規の文学的意欲について論じた。また、今まで見過ごされてきた「居酒屋の窓に梨咲く薄月夜」など、清国を詠んだ俳句の句のもつ意味に触れな

がら、久松定謨伯爵との会合をはじめ、子規の従軍生活について、新しい資料（当時の現地の写真、地図、食事のメニューなど）を基に説明した。

### ○平成二二年六月例会（第八〇九回）

六月一九日（土） 正宗寺本堂 出席者 三四名

講演「樗堂・一茶最後の連句『梅が香の巻』について」

常任理事 今村 威氏

『松山発子規事典』に「小林一茶」の項目を入れたい。その理由は、まず子規の論文「一茶の俳句を評す」が、それまで無名に近かった一茶を、全国的に知らしめるきっかけになったこと。また、一茶は三三歳の寛政七年（一七九五）春と、寛政八年秋から翌年春までの二度、松山を訪れ、樗堂をはじめ松山俳壇と交遊している。その交遊は、お互いに学び合う有意義なもので、一茶にとって松山は、忘れることのできない俳諧修業の場であったことである。

「お断り」前号で、袖山俊夫氏の二月例会における卓話を掲載するよう申し上げていましたが、編集の都合により、次号に載りますことを、お詫びします。

# 平成二二年度総会について

## 松山子規会事務局

松山子規会の平成二二年度総会は、四月二〇日午後一時より子規記念博物館で開催された。

それに先立ち、午前一〇時より同会議室で理事会が開かれ、冒頭井手会長より次の挨拶があった。

一、会員の動静について、新規会員が五名あったことは喜ばしい。しかし、山上次郎理事、喜田重行理事が亡くなられたのははじめ、ご健康ご老齡等のため、七名の方が退会され、現在の会員は一七三名となっている。

一、収支決算等については、会費の減収に加え、書籍販売金の伸びも期待でなくなっている。したがって諺にあるように、「入るを因つて出づるを制す」とおり、更に経費の節減に努力していく必要がある。

一、最後に常任理事会についてであるが、今後『松山発子規事典』の編集の進展に伴い、印刷所や発行所の選定、発行部数の決定、資金の確保等、諸々の案件に対処していくために、補強が必要である。

次いで、『松山発子規事典』編集委員長和田克司氏より、これまでの資料集積と項目概念の説明、および次年度刊行に向けての見通しについて、中間発表があった。

その後、恒例により会長が議長となり、

一、平成二二年度事業報告と同収支決算報告、あわせて監

### 査報告。

一、平成二二年度事業計画と同予算案。

その他の案件についての審議があり、いずれも原案どおり可決成立した。

次いで役員人事については、山上次郎理事、喜田重行理事の死去に伴う欠員補充として、現在子規事典編集委員として活躍されている渡部平人氏を理事に、理事の平岡英氏と三好恭治氏を常任理事とする案も、満場一致で可決され、理事会を閉会した。

午後一時からの総会は、視聴覚室で行われ、理事会審議の案件が、全て承認された。その後、和田克司副会長による「愚陀仏庵の時期における子規、漱石の転機」と題する講演があった。

## 預金目録

平成二二年四月六日

松山子規会

愛媛信用金庫 道後支店

(普通預金) 二〇五、〇六一円 (松山子規会井手会長名義)

## 平成21年度 決算書 (1)

自 平成21年 4月 1日  
至 平成22年 3月 31日

### 収入の部

(単位 = 円)

費 目	予算額	決算額	差引増減
会 費	480,000	438,000	△42,000
普通会費	480,000	438,000	△42,000
賛助会費	0	0	0
寄 付 金	50,000	250,000	200,000
補 助 金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑 収 入	262,389	103,028	△159,361
会誌・書籍売上金	160,000	62,480	△97,520
広告料	40,000	40,000	0
その他雑収入	62,389	548	△61,841
繰 越 金	7,611	7,611	0
計	1,000,000	998,639	△1,361

## 平成21年度 決算書 (2)

### 支出の部

(単位 = 円)

費 目	予算額	決算額	差引増減
報 償 費	165,000	149,000	△16,000
謝礼金	130,000	114,000	△16,000
寄稿謝礼金	0	0	0
編集費	35,000	35,000	0
旅費	0	0	0
需 用 費	830,000	840,245	10,245
印刷費	600,000	634,070	34,070
通信費	80,000	71,295	△8,705
会場費	20,000	24,400	4,400
会議費	60,000	47,260	△12,740
事務費	30,000	21,416	△8,584
備品費	0	0	0
慶弔費	10,000	0	△10,000
雑費	25,000	36,680	11,680
行事補助費	5,000	5,124	124
予 備 費	5,000	0	△5,000
子規事典編集積立金	0	5,000	5,000
計	1,000,000	994,245	△5,755

収入・支出の差額4,394円は次期繰越金とする。  
上記のとおり諸帳簿は正確に処理されておりました。

平成22年 4月 7日

監 査 森 慎吾  
監 査 和 田 カズ子

平成22年度 予 算 書 (1)

自 平成22年 4月 1日  
至 平成23年 3月 31日

収入の部

(単位 = 円)

費 目	本 年	前 年	差 引
繰 越 金	4,394	7,611	△3,217
会 費	500,000	480,000	20,000
普通会費	500,000	480,000	20,000
賛助会費	0	0	
寄 付 金	50,000	50,000	0
補 助 金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑 収 入	230,606	262,389	△31,783
会誌・書籍売上金	160,000	160,000	0
広告料	40,000	40,000	0
その他雑収入	30,606	62,389	△31,783
子規事典編集寄付積立金	300,000	0	300,000
子規事典編集積立金戻り	200,000	0	200,000
計	1,485,000	1,000,000	485,000

平成22年度 予 算 書 (2)

支出の部

(単位 = 円)

費 目	本 年	前 年	差 引
報 償 費	175,000	165,000	10,000
謝礼金	130,000	130,000	0
寄稿謝礼金	10,000	0	10,000
編集費	35,000	35,000	0
需 用 費	805,000	830,000	△25,000
印刷費	600,000	600,000	0
通信費	65,000	80,000	△15,000
会場費	20,000	20,000	0
会議費	60,000	60,000	0
事務費	25,000	30,000	△5,000
備品費	0	0	0
慶弔費	10,000	10,000	0
雑 費	20,000	25,000	△5,000
行事補助費	5,000	5,000	0
子規事典編集費	500,000	0	500,000
予 備 費	5,000	5,000	0
計	1,485,000	1,000,000	485,000

## 平成21年度松山子規会事業報告書

年月	行 事 内 容	年月	行 事 内 容
21年 4月	◎6日 第7回花見会 ◎13日 常任理事会 ◎24日 平成21年度理事会、総会、並びに第795回例会 記念講演、平松丑雄氏 子規の従兄弟と三鼠 ◎24日 第24回子規事典委員会	10月	◎4日 月見芋煮会 ◎19日 第801回例会 講師 理事 平岡 英氏 演題「ホトトギス」と子規・虚子 ◎19日 第30回子規事典委員会 ◎25日 南予支部15周年記念総会 講師 副会長 和田克司氏
5月	◎19日 第796回例会講師理事、馬川武彦氏 演題 笑丑吟社とそれを支えた人々 ◎19日 第25回子規事典委員会	11月	◎19日 第802回例会 講師 理事 竹田美喜氏 演題 真之の子規あてはがき二枚 ～エルトルル号還難始末～ ◎19日 第31回子規事典委員会
6月	◎19日 第797回例会 講師 理事 相原惣三郎氏 演題 小林一茶と栗田禎堂 ◎19日 第26回子規事典委員会	12月	◎19日 第803回例会 講師 副会長 乾 英司氏 演題 子規山脈～南予の群像 ◎19日 第32回子規事典委員会
7月	◎19日 第798回例会 講師 理事 福田安典氏 演題 正岡子規と『天降書』（おもりごと） 講演の後 下村為山 没後60年法要 ◎19日 第27回子規事典委員会	22年 1月	◎19日 第804回例会並びに新年懇親会 道後公民館 会長挨拶 祝吟、武田峰松氏 杉本松雲氏 居合演武 森 慎吾氏 カラオケ等平和やかに盛り上がった。
8月	◎19日 第799回例会 講師 理事 二神 将氏 演題 久万山の人たちと柳原極堂～梅木順子追慕 ◎19日 第28回子規事典委員会	2月	◎19日 第805回例会 卓話 講師 柚山俊夫氏 演題 少年時代の子規宅一帯の住宅地図について 講師 上田一樹氏 松山瀧土としての井手正雄 ◎19日 第33回子規事典委員会
9月	◎4日 常任理事会 ◎19日 第108回子規憲法要並 びに第800回例会講演 今村 威氏 卓話 副会長 和田克司氏 卓話 宇和 宣氏 ◎19日 第29回子規事典委員会	3月	◎19日 第806回例会 講師 渡部平人氏 演題 小山家の人々 ◎19日 第34回子規事典委員会

## 平成22年度松山子規会事業計画

(敬称略)

年 月 日	講 演 ・ 卓 話 計 画			備 考	そ の 他 行 事
	講 師	電話番号	場 所		
22年 4月20日	和田 克司	075-931-3732	子規記念博物館		4月20日 理事会・総会
5月19日	和田 克司	075-931-3732	正宗寺		
6月19日	今村 威	089-971-3527	〃		
7月19日	三好 恭治	089-923-0647	〃		
8月19日	平岡 英	089-941-7509	〃		
9月19日	乾 英司	0894-66-0307	〃		9月19日 109回子規忌
10月19日	二神 将	089-956-4856	〃		
11月19日	宇都宮良治	089-921-3365	〃		
12月19日	今井 道子	089-925-2516	〃		
23年 1月19日	森 慎吾	089-977-7914	石手公民館		新年会。カラオケ大会。
2月19日	忽那 哲	089-975-4363	正宗寺		
3月19日	烏谷 照雄	089-952-0243	〃		
4月未定	井手 康夫	089-977-0304	子規記念博物館		

- (備 考) 1、毎月月例会終了後、『松山発子規事典』編集委員会を開催する。  
2、必要に応じ常任理事会、並びに編集委員を加えた、拡大常任理事会を開催する。

## 小山家の人々

### 大原家・子規との関わり

渡部平人

#### 一 はじめに

一枚の写真からスタートしたい。「明治七年の子規」として『新潮日本文学アルバム 正岡子規』和田茂樹編に提示されている大原家の親族写真である。ここに写っている前列左端の人物について、これまで、ほとんど注目されることもなく、長らくその氏名も生涯も不明のままであった。

その後の、和田克司氏の研究により、この人物は、「小山市次郎 観山塾生、下林の庄屋の息子」(『子規の一生』和田克司編)であることが明らかにされた。

一方、「大原家略系図」には、松山大原家初期の当主に「恒重 実松山浮穴郡下林村里正小山朝長 男」(『大原観山遺稿集』)と記録されている。

どちらも「下林」の「小山」であることから、関係のある親族ではないかと考えられるようになった。筆者は温泉郡拝志村(現東温市)上林の出身であることから、知人等を頼りに小山家とその人びとについて、探索することを思

い立った。

中学生時代の友人に聴くなどして調べていくうちに、小山家の住居は東温市立拝志小学校(下林別府)に隣接しており、筆者の学んだ拝志中学校の当時の音楽科担任が当小山家生まれの高橋清子先生であることが判明した。

早速、高橋清子先生に電話でお伺いすると、「市次郎なんて、懐かしい名前を思い出させてくれて、ありがとう。」との返事。以後、快く情報収集に応じてくださり積極的にご協力いただいたことが、調査を順調に進めていく上での大きな力となったことを特筆しておきたい。

まず、親族の了解を得て旧小山邸の場所を確認し、続いて墓所を訪ねる。小山邸から県道伊予川内線を西へ数百メートル下った小高い笹藪の中に、整備された墓地があり、小山家先祖代々の墓とともに、小山市次郎の墓碑を見出すことができた。夕刻で薄暗く、正面に大きく記された文字は読めるが、側面等に刻まれた墓誌は、苔も生え判読は容易ではない。周囲に親族の墓碑も数多く並んでいるが、時代の古いものは損傷もあって文字を読むことは、殆ど不可能

である。とにかくカメラに納め、持ち帰って検討することにした。

松山市片山（旧北条市）には、小山家の二男謙二郎氏が在任しており、氏のご協力によって、小山家の家譜、過去帳等の閲覧が可能となり、貴重な資料により調査を進めていくことができた。小山家の菩提寺である大安寺（東温市下林）にも資料等の有無を問い合わせたが、小山家に所蔵されている以上のものはない、とのことであった。

小山家に関する先行研究資料は皆無と言つてよい。未だ調査研究されたことがないものと思われ、纏まった文献は見出せない。そのため、未開拓の関係資料を探索し、各資料の照合、関連づけを中心に進めていくこと以外に方法がないため、時間を要し苦心を伴うこととなつた。

ここで、本論に入る前に、大原家親族写真に写っている各人物について確認しておきたい。

（後列右から）

恒吉 マサ 恒吉忠告の夫人、律の最初の結婚相手恒吉忠道の母。

増田 ツネ 子規の叔母。父増田正秋・母増田かね（歌原氏、松陽息女）の長女、のち大原恒徳後室。患陀佛庵で子規が鼻血を出したとき氷を持つて見舞う。

大原 ヒサ 大原恒徳の室（伊藤氏、閑牛息女）、明治

十一年八月二十九日没。逝去後、写真の顔を黒く塗りつぶされ、顔形は不明となる。

藤野 十重 正岡八重の妹、藤野漸の室、二十二歳。大原観山の二女。

藤野 潔 子規の従弟で号は古白、三歳。父藤野漸・母十重の長男（漸は撮影当時宇和島にいた）

正岡 八重 子規の母（正岡常尚夫人）三十歳  
歌原 ハル 子規の大叔父歌原邁の室、三並良の母。子規の義理の大叔母。

増田 カネ 増田正秋室（歌原氏、松陽息女）、歌原邁の妹、大原観山室シゲの妹。子規の大叔母。

（前列右から）

佐久間恒元 大原観山の三男、当初佐久間氏、後、岡村氏を継承、号は三鼠。

歌原 良 歌原邁の長男、子規と従兄半、十歳。三並氏を継承

正岡 常規 八歳（満五歳七ヶ月）髻を結んでいる。  
増田 正春 父増田正秋・母増田カネ（歌原氏、松陽息女）の長男、子規と義理の従兄半。明治十五年当時は湊町四丁目の歌原家に居た。のち丸

亀に移る。陸軍に入る。

増田 ミネ 父増田正秋・母増田カネ（歌原氏、松陽息女）の二女、正春の妹。





【大原家親族】 平松牛夫氏所蔵

正岡 律 子規の妹、五歳（満三歳五ヶ月）。  
小山市次郎 観山塾生、下林の庄屋の息子、十三歳。

（『子規の一生』和田克司編、同氏補訂）

## 二 小山家の系譜

小山家の系譜について、同家所蔵の「伊豫国 小山氏之系譜」により、抄出し概要を提示したい。

小山家の先祖は遠く七世紀後半にまで遡ることができ、その始祖は中臣鎌足である。天皇の厚い信任を受け、のち内大臣に任ぜられ「藤原氏」の姓を賜った。

三百年近くを経て、後裔の秀郷は下野国、小山に住し武蔵守に任ぜられる。子規は明治十五年、十六歳の時、「藤原秀郷」と題する五言絶句の漢詩を作っている。後に述べるように、小山家と大原家が深い関係にあることを意識しての詩であるか否かは未詳である。

平安末期になって、秀郷の後裔の家政は初めて「小山」姓を名のる。さらに、頼朝の挙兵に際して大きな功績があり、頼朝から「朝」の字を賜り「家政」を「朝政」に改めた。建久年間（1190）のことである。以後、「朝」が重要な通り字となる。

応永十年（1403）、朝継は土州へ下向し、その後豫州に至り、宅地及び水田五十町を賜って拝志村に定着した。

二百年後の慶長八年（1603）、朝重は拝志村の村長となり、その三年後には初めて庄屋に任ぜられた。

更に七代後の朝長の二男（或いは三男か）が松山大原家に養子として迎えられるのである。

江戸時代末期の弘化二年（1845）、朝真是地域一帯の灌漑用水確保のため、長年の課題であった佐古谷池を築造、その功績を称えて佐古谷神社が創設され、その祭神に祀られた。このことは、後に詳述する。

明治に入つて、朝明（俗名浦蔵）は、村民からの信望も厚く、拝志、川上、三内の三村の村長に任ぜられる。

そして、朝章（俗名市次郎 文久二年生まれ、明治四十四年没）、朝賢（俗名繼一郎 明治十九年生まれ、昭和二十三年没）、駿一郎（朝経、平成十四年没）と続く。

### 三 大原家「家譜」

ここで、小山家と大原家の繋がりを示すため、「大原家略系図」（「大原観山遺稿 解説篇」）により、大原家代々の当主を掲げておく。

三津大原家より分家した松山大原家の代々当主は、

正恒 享保六年 老徒行となる 延享二年没

恒重 詳細後述

恒幾 恒重長男 正恒の養子となる 天明八年没

恒一 城山奉行となる 享和三年没 室三好氏

恒固 手廻頭となる 安政五年没 室加藤重孝長女

有恒 観山 漢学所司教 加藤重孝第三子 室歌原

宗藏の長女 明治八年没

恒徳 愛媛県属拜命学務課勤務 五十二国立銀行勤

務 号蕉雨 大正八年没

尚恒 官設鉄道に奉職 正五位勲四等下賜 昭和

三十八年没

恒武 昭和四十五年没

宜恒 現当主 東京都世田谷区在住

観山の子女については、以下のとおりである。

八重（長女） 正岡常尚室

十重（二女） 藤野漸室 古白の母

小太郎（長男） 夭逝

恒徳（二男） 室伊藤久子 後室増田常子

三重（三女） 岸重崔室 駿、喜二雄の母

恒忠（三男） 拓川 加藤家を継ぐ

恒元（四男） 三鼠 岡村家を継ぐ

### 四 大原恒重

松山大原家第二代当主恒重は、「家譜 大原氏」によれば次のとおり記されている。

称丹七 実松山浮穴郡下林村里正小山朝長男

享保四年為徒士賜切米八石扶持二口

十八年十二月二十七日賜切米十石  
二十年十一月十五日転徒士小頭  
寛保三年四月九日終葬正覚寺  
积号曰随誉堅意信士

〔大原家家譜〕

下林の里正(村長) 小山朝長の二男(または三男)の恒重が大原家の婿養子となった。室は大原正恒の長女で後室は同正恒の三女。初代正恒には五人の子があつたが皆女性であつたため婿養子を迎えた。長子恒幾が第三代を継承、以来、小山家と大原家とは親戚関係が続くことになる。

## 五 小山市次郎

小山市次郎の祖父及び父について触れておく。

祖父の朝真のことは、「七 佐古谷池の築造」で詳述するので、ここでは墓碑の記録のみに留める。墓碑には、

安政三年十一月十三日 没

大功院忠道義俚居士

俗名 小山九左衛門

と記されており、享和二年(一八〇二)の生まれである。

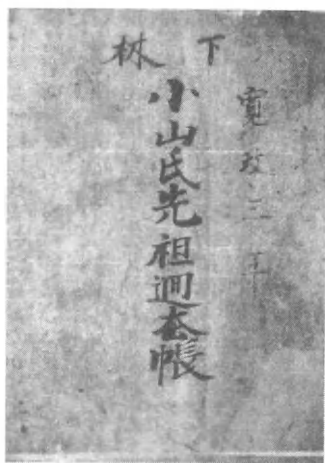
父・朝明(浦蔵)は、過去帳には左のように記されている。

明治二十九年(一八九六年)八月十四日 没

大徳院賢道朝明居士朝明 俗名 小山浦蔵

此ノ靈 大功院朝真之二男也 兄猪太郎早世ノ故ヲ以テ父祖ノ業ヲ継ク 勤儉ニシテ學ヲ好ミ 家ノ礎ヲ固ム 夙ニ改庄屋大庄屋格式ヲ拜シ 帯刀ヲ許サル 維新ノ後縣政ニ参与ス 又拜志川上三内之三村長ト為ル 享年六十六而卒 墓同右所ニ在リ

〔小山家代々過去帳〕



小山家過去帳

没年から逆算すると天保二年(一八三一)生まれとなる。拜志村、川上村、三内村の三村の村長に任ぜられたことから、大庄屋格として帯刀を許された。学問を好み、家系・家譜等の記録整理に努めた。三十七歳で明治維新となり県政に参与した。

〔市次郎〕

続いて、市次郎について、これまでの調査で判明したことを述べる。

(1) 出生 文久二年(一八六二) 俗名「朝章」

(2) 墓所

大原家の養子となった恒重から五代後である。

温泉郡拜志村（現東温市）下林

先祖の墓碑が各所に散在していたのを小山春子（繼一郎室）が新たに墓所を築造し一カ所に集めた。後に同墓所は、下林地区の大安寺に移された。（平成二十一年十二月）

(3) 墓誌

翠竹院立齋朝章居士

小山市次郎諱朝章母宇高氏其長男也

以明治四十四年五月十四日歿 享年五十

室 真光院清眞榮大姉

小山市次郎妻温泉郡持田邑三好豊保長女

字榮明治廿七年五月十五日歿



小山市次郎墓碑

市次郎室の榮は温泉郡持田邑（現松山市持田町）三好豊

保長女で、持田三好家は道後三好家（大庄屋）より江戸時代中期以降に分家した。なお、榮は三十歳で没し、後室に同三好家三女「類」を迎えた。

類は、小山家過去帳には次のように記されている。

珠徳院温光妙類大姉 明治三十八年十二月二十一日

没

此靈翠竹院後妻道後村持田三好豊保三女真光院之実

妹也

享年三十三墓道後村鷺谷二在り

類の墓は、当初は道後鷺谷に在ったが小山春子氏が下林に小山家墓地を整備した際、移転したものである。

(4) 過去帳に見る市次郎の人物像

此ノ靈 大徳院之嫡男也 幼時ヨリ病弱ニシテ公務ニ  
参与セザルト雖モ學ヲ好ミ能ク家ヲ守ル儉素ニシテ  
篤実生ヲ風流韻事之中ニ終ル慈心深ク村ヲ挙テ其ノ  
死ヲ惜シマザルナシ行年五十而卒墓志茂林山大松南  
二在り」 （「小山家代々過去帳」）

言うまでもなく、子孫の目で見た市次郎の人物像が、尊敬の心をもつて簡潔に述べられている。

市次郎は、幼時より病弱であったため、親の勤めもあつてか学を好み励んだようである。小山家の管理運営にも意を用い、多趣味で書画骨董を集め風流韻事の中に生を終えている。（志茂林は、下林の旧名）

(5) 「観山塾生」としての立場

市次郎は、書生として大原家に住み込んだと考えられる。塾生の場合であったとしても、当時は鉄道も開通していないため下林の小山家からの通塾は困難であり、大原家に住み込み家族同様の生活をしていたと考えるのが至当である。

観山先生は明治八年三月六日に没するが、その時市次郎は十一歳、学業の途中であり以後も大原家に留まって学問を続けたと思われる。

(6) 大原家の親族写真撮影に同席

大原家第二代恒重が小山家より入籍して以来、百二十余年余り小山家と大原家は親戚付合いが継続していたことから、市次郎が観山塾の塾生となっていたことは前述のとおりであるが、そうした状況のなかで、大原家親族の女性と子どもたちが何らかの行事で道後へ出かけた。時期、参加者から考えれば「おなぐさみ」であったと断定してよい。

「おなぐさみ」は、子規の記録によれば以下のとおりである。

郷里の風俗におなぐさみといふことあり 春暖のころにもなればさ、え重箱など携へて親族友だちさそひ合わせ石手川の堤吉敷の土手其他思ひ思ひの処に遊び女子供は鬼事摘草に興を盡し(中略)

なぐさみや花はなけれど松葉閣

〔寒山落木〕二十九年春

余の郷里にては、時候が暖かになると「おなぐさみ」といふ事をする。これは郊外に出て遊ぶ事で一家一族近所合壁などの心安き者が互にさそひ合せて少きは三、四人多きは二、三十人もつれ立ちて行くのである。(中略) 食時ならば皆こゝに集つて食ふ、それには皆弁当を開いてどれでも食ふので固より彼我の別はない。(中略) 余の親類がこぞつて行く時はいつでも三十人以上で、子供が其半を占めて居るからにぎやかな事は非常だ。

〔墨汁一滴〕四月十日

市次郎は、大原家の親族の一員として「おなぐさみ」に同行し、一緒に遊び弁当を食べた後、全員で記念写真を撮る。単に「観山塾生」というだけでは親族写真には一緒に撮影されることはない。全員が互いに親族として自然でリラックスした雰囲気であり、律が市次郎のすぐ傍に、何の違和感も持たず座っている。その場で、様々な会話が交わされ、いっそう親しみを深めたに違いない。

(7) 子規との交友の可能性

市次郎と子規との交友について、子規の記録は見られない。あらゆることを記録する子規にしては、珍しいことであるが、親戚であっても一切記録のない例が他にない。

市次郎は子規より五歳年長の先輩格であるため、畏敬の目で見ていたか。子規には近所に従兄半の三並良がいて、親密な交友関係にあったこと、当時の大原家は三番町四十八番地で、正岡家とはやや距離があったこと等から、日常的な、遊びの行き来はなかったとも考えられる。ただ、子規と三並良は観山塾に通っていたので、顔を合わせることはあつたはずである。

当時の大原家の住居は、つぎのとおりである。

明治の初めには、三番町より出淵町に移転、その後、明治七年には三番町四十八番地の地に移る。明治十二年頃湊町四丁目一番地の子規の家の西隣に新築移転。明治十九月末以降は、同地一番戸より湊町四丁目十番地十九番戸。

(「松山発子規事典草稿」和田克司)

明治十二年、大原家が子規の家の西隣に移転してきたとき、市次郎は同居したままか、千舟学舎に入ったか、下林の小山家に帰ったか。その点について資料はなく、未解明のままである。

(8) 子規幼年時代の塾での学び 市次郎の学び

子規が観山塾の塾生であつたとして、どのような学び方をしたのか、それを示す記録は残されていない。従つて、子規の記録に基づいて当時の子規の学びを検討し、

そのことを通して市次郎の学びが推測できる。

「稽古始め」と題する子規の記録がある。

「八つの歳は、外祖父大原観山翁の家塾の稽古始めとて、余も其列に加はりぬ。其人數三十人許もありぬべし。此時余は翁に孟子の素読を学びつつありしなり。」

(「新年二十九度」)

また、三並良の記録(「子規の少年時代」)によれば、毎朝五時頃、子規と良は相携えて先生の処へ行き素読を教わつた。他の子供には門人が教えていたが、子規と私(良)とは自ら教えた。観山先生の慇懃によつて詩会を組織した。書画会も同様にやっていた。会するものは、大体五人だったが、其の他にも、二三人はあつたかも知れない、といった状況である。

こうした観山塾での勉強に市次郎も加わっていたであろうことは、想像に難くない。

観山先生は明治八年三月に没したため、その後は河東静溪私塾(「千舟学舎」)に通つた可能性がある。

静溪私塾については、明治十五年五月に提出された「設置願」により、その概要を知ることができる。

① 場所は温泉郡千船町七十一番地。

② 入学生徒については、士民、年齢を問わない。

③ 生徒人員は百名から百五十名で、年齢十四歳以上。

④ 寄宿舎を設置。

⑤ 素読が中心で毎朝六時より九時まで、午後は一時から四時、夜会は一時間。

〔私立学校設置之儀付何〕

士民を問わないこと、年齢的にも適合すること等から、市次郎が寄宿舎に入った可能性もある。

三並良の記録によれば、

「一週間に何度か夕刻から出かけて、靜溪先生の『八大家』や『近史録』の講義を聴いた。四書中の何かを輪読して、討論をやった。我々には幾人居たか記憶はないが、特に親しかったものは五人あった。」

〔子規の少年時代〕三並良

この他に、土屋先生に学んだ可能性も否定できない。観山先生が病弱になったとき、既に子規は小学校へ通学していたが、小学校の内容には飽きたら漢字も棄てがたかったため、藩の儒者の土屋先生に学んだことを良は記録している。

正岡家と小山家との交流の可能性について、明確に示す資料は遺されていない。また、何時のころまで松山に留まって学問に励んだかについても、今後の研究に待ちたい。

## 六 小山繼一郎

市次郎の長男である繼一郎について、過去帳には、次のように記されている。

〔瑞光院哲笑朝賢居士 俗名 小山繼一郎

昭和二十三年九月十八日 享年六十三歳〕

このことから、出生は明治十九年（一八八六）であり、父市次郎が二十四歳のときであった。

(1) 松山子規会の発足及び初期の運営に尽力

松山子規会の発会は、昭和十八年一月十九日である。

その日午後一時に末広町正宗禪寺に会したのは、

岩崎一高 景浦直孝 西原武雄 小川尚義 柳原正之

曾我鍛 田中宗坦 竹田文平 村上半太郎 山本義晴

原田光三郎 西園寺源透 酒井和太郎 小山繼一郎

田中七三郎 菅菊太郎らであった。繼一郎、五十八歳。

会長に菅菊太郎氏が推薦され、幹事は会長により次の五名が指名された。

原田光三郎 小山繼一郎 田中宗坦 田中七三郎

曾我鍛 〔子規遺芳〕

同じことが『人間 正岡子規 和田茂樹著』では、「伊予銀行の小山繼一郎らが企画の中心」となると述べられている。繼一郎は、昭和十二年に設立された松山五十二銀行の取締役を務めていたが、同銀行は昭和十六年に仲田銀行と合併して、新たに伊豫総合銀行が設立された（伊

予銀行五十年史)。親族談によれば、繼一郎はその時点では、非常勤の監査役であった。

その後の子規会例会では、毎月のように子規作品鑑賞会が催されたが、繼一郎は毎回出席して、「万葉集」等の古典への深い造詣を示しつつ提言している。

昭和十八年二月十九日の第二回例会では、初参加者として「村瀬純一」の名が記録されている。村瀬純一は繼一郎の姉の子で、甥である。繼一郎の推挙による参加と思われる。

昭和十九年二月十九日の第十四回例会では、参加者二十九名が記念写真があり、前列右端に繼一郎の姿がある。

第三十回例会が昭和二十年六月十九日に開かれ、「役員改選期 全員重任のほか小山氏の会計係復旧を決定」(『子規遺芳』)とある。

しかし、七月二十六日には松山空襲で湊町四丁目の家屋、家財が全焼したため下林に帰っており、以後、繼一郎の活動の記録はない。

(2) 岸 駿(ハヤマ)との親交

岸駿は平松丑雄氏の発表資料(松山子規会平成二十一年四月例会)によれば、

明治十八年十二月生。昭和三十七年三月死去。横浜正金銀行の調査部長。父・重崔(五十二銀行監査役)、

母三重(大原観山の三女)の長男となつている。

繼一郎は十九年生まれで、年齢も近く日頃から親交があった。そのため、繼一郎は長男の出生の際、「駿」の字をもらつて「駿一郎」と命名した。(高橋清子氏談)

(3) 山頭火との交友

山頭火の『一草庵日記』には、昭和十五年三月三日、高橋一洵らと拝志村下林の小山邸を訪問し句会を開いたことが記されている。

十時の汽車で田ノ窪へ、そこから一里ばかり歩いて、拝志の小山邸へ、同行は一洵、月邨、三土思夫妻、布佐女、栗田姉妹、男四人の女四人で、賑やかであつた。田舎はよいなあと思ひながら野を行き川を渡つた、皿ヶ峰は特殊の上形をひろげて居た、重信川はすっかり涸れてゐた。

小山邸は昔風の大きい空屋敷だつた(庄屋であつたさうな)、庭園が広くて万両がこゝにもそこにも赤い実をかゞやかせてゐた、老梅もよく、大南天もおもしろかつた、すべてに旧家らしい色彩と香気が残つてゐた、ゆつくりお弁当を頂戴して句座を開いた、まことにのんびりした会合だつた。

帰途はまた賑やかに田ノ窪駅まで歩いて、五時の汽車で市駅まで、そこから私は一人で歩いて戻つた、かなり草臥れた。



山頭火らしい書きぶり、小山邸での句会の様子や庭園の状況が描写されている。文中の「布佐女」は、繼一郎の姪（姉の子）の「二神房」。繼一郎は同行していないようだが、山頭火との平素の交友があったからこそ、姪の房が山頭火から大勢の客とともに小山邸に来訪することになったのであり、繼一郎は先に下林の小山邸に帰って準備し、接待したであろうことは容易に想像される。

(4) 川柳に親しむ

繼一郎は、「哲笑子」の号で川柳もよくし、結社「柳絮会」の同人となった。明治四十年ころ海南新聞には、同紙の編集長であった田中蛙堂によって柳壇が設置されたが、繼一郎はその中心メンバーとなって藤野川影らとともに活躍した。

電線のつばめ勝手な方を向き

重箱の隅で留めの芋刺さり

(5) 英語に堪能

戦後、進駐軍が拝志小学校に来たとき、英会話ができる者はいなかった。住民のひとりが「小山の旦那に頼めばいい。」と言い、呼ばれた繼一郎の流暢な英語で話し合いが成立した。繼一郎は、宣教師の指導を受けて英会話を身につけていたのであり、自身もそのことを誇りにしていた。

以上の他に、伊予史談会にも所属するなど、多方面にわたって文化的な足跡を残している。

## 七 小山朝真による佐古谷池の築造

市次郎から三代前の先祖である朝真が、地域の水田灌漑のための池を築造し、地域に大きく貢献した。その状況は以下の如くである。

朝真については、過去帳の記録には、

安政三年（1856年）十一月十三日没

大功院忠道義侯居士

俗名 小山九左衛門

此ノ靈 讓篤院之養子而同姓田窪村小山九良右衛門

朝鎮之実子也 在勤二十八年 左古谷大池ヲ築キ左古

谷神社トシテ祀ラレ今日ニ至ルモ祭祀ヲ絶タズ享年

五十五 〔小山家代々過去帳〕

とある。地域住民は、大池を築いた朝真を称え感謝して神社を建て祭神として祀っており、今も五月初めに例祭が実施されている。

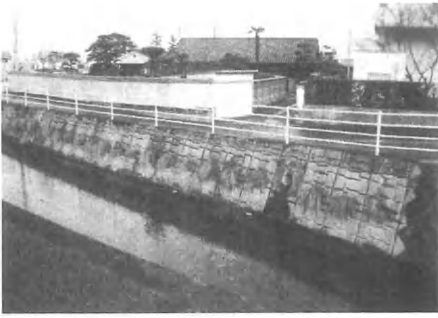
その佐古谷池は、拝志村（現東温市）下林に築造された。

その経過は、重信史談会の石丸法明氏の研究「佐古谷池の歴史と今後の課題」（重信史談第十二号）に詳しい。

以下、概略を抄出する。

江戸時代の後半以降、重信川流域の水田面積も次第に拡大してきたが、水利は重信川の流水によっていた。そのため、渇水期になると川南地区と川北地区とで毎年のように争い起こり、流血に及ぶこともあった。

灌漑用水を確保し、争いをなくすためには佐古川に大池を築造する以外に方法はなく、下林の庄屋であった朝真を中心に計画が具体化された。その時、池の下流の村民からは土手の決壊を恐れて、いつせいに反対の声が上がった。普請用係として総指揮に当たっていた朝真は、山裾にあった自身の住宅を、川筋の一番低い場所に移転した。それは、大池の土手が決壊すれば、第一番に被害を受ける場所であった。朝真の義拳を見て、それまで反対していた地域住民は絶対的な信頼の気持ちに変わり協力する者が続出した。天保十三年工事開始、三年後の弘化二年（1845）竣工した。



大池下流の小山家住宅



佐古谷池神社

朝真は、人間的にも優れ、藩との折衝等においても政治的な手腕を発揮するとともに、新田の開発にも尽力した。そのような経過をとおして大庄屋としての地位を確立していったのである。

朝真は、大池の竣工間もない安政三年十一月に没したが、その後、住民によつて下林宮の段の築島神社の境内に佐古谷池神社が建立され、祭神となった。（この項、『重信町誌』祭神としては、朝真の他に施工責任者の野中三太夫通助も祀られ、今日に至るまで、毎年五月一日に祭礼が実施されており、祭神が関係地区住民からいかに感謝され崇められてきたかを証明している。

佐古谷池が築造されてから今日まで、流域住民の受けた恩恵は計り知れない。県下最大級の溜め池で、堤長九十メートル、堤高十五メートル、容積十二万立方メートル、貯水量は三十、九万トンと桁外れの大きさである。

その後、平成六年四月、大池は取り壊われ、代わってコンクリートダムが建造された。現在、ヨット、カヌー等の練習場としても活用されている。ダムはほとりに案内板が設置され、ダムが造られる前の佐古谷池は、永年に亘つて水利のために大きな役割を果たしたことが説明されている。しかし、そこには「朝真」の名前は刻まれていない。

## 八 小作文庫

愛媛県立図書館のホームページには、特殊資料として「諸家文庫」があり、その一つとして「小作文庫」が設置されている。諸家文庫には、他に「景浦文庫」「桜井忠温文庫」等の十四文庫があるが、小作文庫はそのうちで、最も早い時期に設置された。

小作文庫 (おやまぶんこ)	
旧蔵者	小山繼一郎
設立年 (西暦)	1969
分野・テーマ	漢籍
旧蔵者のプロフィール	拝志村 (現愛媛県温泉郡重信町上林、下林、上村) 村長などを務めた。
沿革・概要 (文庫の目的・由来)	故小山繼一郎氏旧蔵資料
資料の特色・点 (冊)数	455冊 漢籍
目録	「小作文庫目録」(館内利用) 当館ホームページ上の蔵書検索にて検索可能 別置記号「コヤ」
利用	館内閲覧のみ

(愛媛県立図書館ホームページ 資料案内)  
 文庫の目録が作成されており、書名、巻数、著者名、出版年、装丁等が一目で分かる。全てが広義の漢籍で和綴じ、江戸時代の刊行である。虫喰いによって、ページの半分以上が損傷し読むこともできない状態のもの、表紙から内部まで傷みのないもの等様々である。

### (1) 主たる蔵書名

小作文庫の蔵書を明教館の分類に従って列举すれば、その主たるものは次のようになる。

- \*『易経』(二冊) \*『書経』(一冊) \*『詩経』(二冊) \*
  - 『礼記』(三冊) \*『春秋左氏伝校本』(十五冊) \*『中庸集略』(二冊) \*『論語』(四冊) \*『孟子』(四冊) 『四書』(十冊) \*『小学』(五冊) 『史記評林』(四十冊) 『漢書評林』(五十冊) 『元明史略』(四冊) 『逸史』(十冊) 『朱子行状』(二冊) 『文選』(十二冊) \*『唐宋八大家文讀本』(十六冊) 『小学示蒙句解』(十冊) 『四書訓蒙輯疎』(二十二冊) 『近思錄』(四冊) 『古文真宝』(二冊)
  - \*『文章規範評林讀本』(二冊) 『蒙求』(三冊) 『家礼』(二冊) 『国語』(四冊) 『千慮策』(三冊) 『風雪帖』(一冊) 『文公家礼』(八冊) 『閻氏全書』(三冊) \*『日本外史』(十一冊) \*『日本政記』(十五卷) 『前々太平記』(十冊) 『定刻明治早引大全』(一冊) 『延平答問』(二冊) 『臨濟禪師録』(一冊) 『六祖大師宝壇経目録』(一冊)
- \*印を付したものは「千舟学舎」の教科用書に選定さ

れた図書で計十三種ある。

四書五経に関しては「子規蔵書目録」と重なるものが多く含まれている。

(2) 寄贈による「文庫」の設置

寄贈したのは、「昭和四十四年十一月、小山春子氏」であることが各書籍にゴム印で示されている。

県立図書館への寄贈は極めて適切な判断であったと言える。繼一郎の死後、遺された蔵書が春子夫人により寄贈され「小山文庫」として設置されたことよって、貴重な資料として後進による活用が可能となった。その閲覧・点検をとおして、書籍の入手の方法が判断でき、当時の学問の内容や進め方を推定することができる。

小山家で、書籍はどのように保管されていたのか。湊町四丁目の小山邸は、昭和二十年七月の空襲で全焼し立派な造りの土蔵も最後に焼け落ちた。図書は、防空壕等に何らかの形で保管されていたか、或いは、空襲を予想して下林の小山邸に移管されていたことも考えられる。

(3) 蔵書への書き込み等

蔵書を丹念に調べていくと、次のような様々な書き込み等が目につく。

① 『唐宋八大家文読本』十五冊の各ページの欄外に、朱で漢文体による書き込みがある。これは、観山先生が講述のために書き込みをしていた書籍を市次郎が譲り受けたか。または、市次郎が門人として講述をしたこ

とも推測され、そのための書き込みとも考えられる。

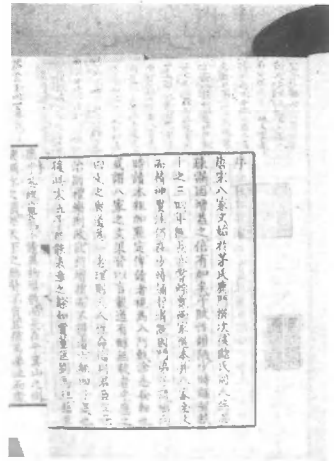
② 『唐宋八大家文読本巻二九三〇』の最終ページには、「癸未二月十八日再閲」との朱書がある。「癸未」は文政六年（1823）か、明治十六年（1883）とするか。同書は文化十一年（1814）の刊行である。

前者の場合とすれば、朝明の記録の可能性、後者の場合であれば、朝明か市次郎の可能性がある。

③ 『唐宋八大家文読本巻二三』（文化十一年の刊行）には、「十二年六月十八日閲」の書き込みがある。「十二年」は、明治十二年であれば市次郎の記録と思われる。



「大原氏蔵書」印



朱による書き込み

これらの書き込みや蔵書印等から、小山文庫の四百五十冊に余る書籍の入手経路の一部が明らかになった。

さらに、三並良の「子規の少年時代」によれば、「観山先生の蔵書も、我々の為には開放されていた。未亡人の伯母（良からみて）に「持つていくぞな」と云うと見もせずに「さうかな」と云つてくれ、伯母は太つ腹であった。」とあり、そうした経路が市次郎の場合にもあったことが類推される。

④ 「河東氏図書印」が『唐宋八大家文読本七八』『續唐宋八大家文読本卷二三』の表紙裏に押印されている。河東静溪先生の所有であったものが、何らかのルートを経て小山市次郎か継一郎に渡ったものか。直接、市次郎に手渡されたものか。市次郎が静溪私塾「千舟学舎」で学んだ可能性も推測できる。

⑤ 「大原氏蔵書」の印が『天聖明道本 国語』等に押されている。大原観山の蔵書を市次郎が譲り受けたものと考えられる。

⑥ 『書経』巻末に「弘化五年求之」の記入がある。小山朝明の購入の可能性が高い。

⑦ 「小山朝明」「小山朝章」の署名が『詩経』の表紙裏と裏表紙に見える。

## 九 湊町四丁目の小山家住居

これまで、湊町での小山家住居の所在地が確定できなかったが、親族の証言により、「湊町四丁目十三番地」であったことを確定することができた。

このことは、同十番地の大原家の屋敷と離れに該当する子規の母妹の家との関わりを考える上でも肝要であり、ま

た、周辺の住居を明確にするための大きな手掛かりとなつてくる。

(1) 転居の時期

小山家が湊町四丁目に住居を構えたのは、何時だったのか。それを考える時の一つの手掛かりとなるのが、「火災の記録」である。大原恒徳の記録『大原家譜』には、

「明治二十九年（一八九六）六月七日、近火（同町樋口家）」

とある。近火の時、市次郎は三十六歳。大原恒徳が、意図的に記録していることから、火災のあった「樋口家」の跡地に恒徳の世話で小山家が新築した可能性が考えられる。

同じ近火について、海南新聞の記事では、

「七日午前二時四十分頃松山市大字港（ママ）町四丁目（新町）田邊少佐方より出火半焼同三時三十分鎮火せり」（明治二十九年六月九日付）

となっている。「田邊少佐方より出火」とあるのは、樋口家所有の貸家か何かに「田邊少佐」という軍人が入居していたということか。いずれにしても、樋口家の火災の跡地に小山家が新しく家を建て入居したものと思われる。

移転入居の時期は、火災以降、父浦蔵の他界が八月十四日であり、それを契機に樋口家の跡地に小山家が入った可能性が高い。

他の契機としては、継一郎の中学校入学のために移転が考えられる。明治十九生まれの継一郎は、中学入学の時期を迎えていた。当時、地元下林に小学校や高等科がなかったわけではない。しかし、大安寺等の寺院を利用した学校であり（重信町誌）、教授陣も充実していなかったはずで、地元での教育に余り期待できないため、より充実した教育を求めて住居を移したものと思われる。

実際の移転に当たっては、大原恒徳からの勧誘があったことが推測される。恒徳は、一族の長としての責任感の強さから、同十二番地の伊藤家入居の場合と同様、市次郎に助言し働きかけた可能性がある。

(2) 住居平面図

親族にお願いして、記憶を頼りに小山家の平面図を描いていただいた。

各部分について、親族からの説明等を注記する。

① 門 重い板戸で、片開きであった。瓦葺きの

屋根が付いており、門を入るとすぐ黒石の石畳になっていた。

② 塀 腰が焼き杉で瓦屋根付き。

③ 玄関 新丁通り側と中の川側の双方にあった。

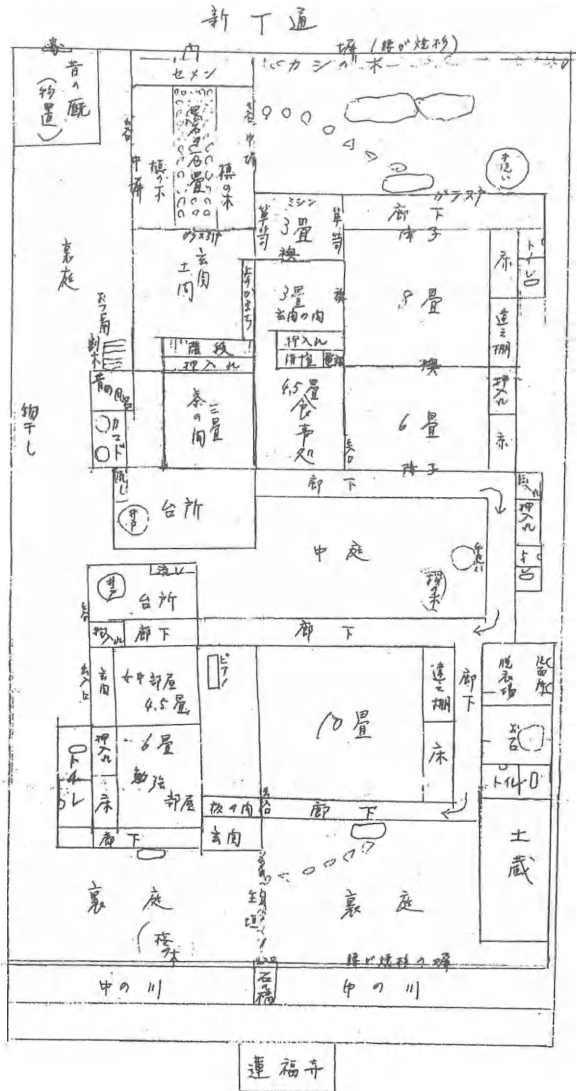
④ 土蔵 耐火性が強く、空襲の時には、なかなか

⑥ 中庭  
⑤ 既

燃えなかつた。最後になって、炎に包まれ  
大きな音と共に焼け落ちた。  
近辺にはないもので、住人の裕福さを示  
す。或いは旧藩当時のものか。  
南側と北側の建物が廊下依いになってい  
た。南半分は後になって増築、繼一郎が大  
工と一緒に高松まで行き、梅の木の節目の

⑦ 勉強部屋  
⑧ 井戸

ないのを買ってきた。新築後は、糠ぞうき  
んで磨いた。  
重品であつた。  
二カ所にあり、モーターポンプを設置。  
当時は近辺でも珍しいもので、生活の合理  
性を求める繼一郎の思いが込められた。



湊町四丁目小山家住居平面図  
(高橋清子氏・小山謙二郎氏作成)

以上の他に住居に係る事項として、

○「貴重品や値打ちのあるものは、下林の家から運び入れた。」

○「子規の横顔の写真が床の間に掛けてあった。繼一郎は、いつも「子規さん、子規さん。」と言っており、親戚の者に声をかけるような、親しみをもった言い方をしていた。」

等の親族による証言がある。

(3) 湊町四丁目の街並み

平成二十二年二月の子規会例会における柚山俊夫氏の発表「少年時代の子規宅一帯の住宅地図について」によって、より正確な街並みの説明が可能になった。今後の進展が期待される。

新丁通りの南側には、焼き杉の腰板を使った塀が続いていた、との証言もある。

(4) 子規の育った環境 市次郎の過ごした環境

長町のかどや燕の十文字 二十五年 春

(『寒山落木』巻一)

柳散る長町裏の小橋哉 二十八年 冬

(梅屋句稿「俳句三拾七景」)

湊町四丁目一番地周辺は、「長町新丁」とも呼ばれた。これらの句から、当時のゆつたりした環境が偲ばれる。

「仰臥漫録」には、次の記述がある。

「明治三十四年九月二日

午後八時腹の筋痛みてたまらず鎮痛剤を呑む(中略)母も妹も我枕元にて裁縫などす三人にて松山の話殊に長町の店屋の沿革話いと面白かりき 十時半頃蚊帳を釣り寝につかんとす呼吸苦しく心臓鼓動強く眠られず煩悶を極む(後略)」

耐え難い病苦に苛まれ、煩悶を極めるなかで、親子三人での長町の思い出話がおもしろく、わずかに病苦を忘れることができた。子規には長町の思い出は貴重でこころ癒されるものがあった。

三並良の証言を引用する。

「(その時代の吾々は)遊びに行きたい所なら、山でも、河でも、芝居へでも何処へでも行けた。

読みたいものは皆な読んだ。(中略)環境のなかに子規特有の天才はやわらかに芽をふいて行つたのである。彼が上京後、根岸に於いて大成したことは、皆その芽生へを松山の少年時代に見せて居る。」

(「子規の少年時代」三並良)

子規の少年時代の環境が、後の人間形成に大きく影響したことについての、同じ時代を子規の最も身近にあつて共に過ごした友人の証言として貴重である。

小山家親族の談話に「新丁には、文化的にも経済的にも豊かな人びとが多く住んでいたように思う。」「互いに



助け合い譲り合う気持ちで生きていた。「余裕をもって生活していた。子どもたちも家を訪問しあつて遊び、よく交流していた。」等があり、昭和十年代においてもなお望ましい環境が残っていたと言える。

(5) 松山空襲被災

昭和二十年七月二十六日二十三時頃より約二時間、敵機による空襲のため、小山家は周辺の街並みとともに全焼した。貴重品等を収納した土蔵は火に包まれても焼けず残っていたが、最後になって大きな音をたてて崩れ落ちた。

防空壕も設置されており、収集された書画骨董、最も重要な書籍文書類等は、そこに保管されていたが、それから貴重な文化財が、一瞬のうちに灰になってしまった。戦争とはいえ、余りに残念なことであった。

二日後、継一郎は憔悴しきつた表情で下林の小山家に帰った。

十 今後の課題

一般には、殆ど知られていなかった小山市次郎と継一郎について、ある程度の検証をすることができた。今後、新しい資料等が発掘されれば、なお内容のある顕彰ができるのではないかと思われる。

これまで、大原氏先祖のうち未解明であった初期の大原

家について、小山家から婿養子が入っていたことが確認できたことは、収穫であった。

先行研究資料に乏しいため、自ら見出した資料の意味づけや解釈に難しさがあり、推測を含めた組み立ての部分もある。今後、新しい資料の発見と補正に努めたい。

「大原家の親族の写真」は貴重な資料であることを再度、強調したい。この写真が撮影され、残っていたことで、小山市次郎の発見に繋がった。大原家親族の一人一人についても、調べていく手掛かりとなった。この写真の存在意義は真に大きい。

(参考文献)

『大原観山遺稿』 石丸和雄・和田茂樹編 愛媛文学叢書刊

行会、青葉図書、昭和五十七年六月

『子規遺芳―松山子規会史―』 松山子規会編 青葉図書、

昭和五十九年三月

(平成22年3月例会での発表に加筆・修正)

## 服部嘉修先生追悼

和田克司

正岡子規の親戚にあたる服部嘉修先生が、急逝された。痛恨の極みであり、心からの哀悼の意を表する。嘉修先生は、大正七年（一九一八年）生まれ、享年九十一歳であった。今年二月二十六日に緊急入院され、加療の後、意識を回復され、しばらくは小康を保たれたが、三月十三日に永眠された。ご遺志により、七七日の供養、納骨もご家族のみにて執り行なわれたことが、五月二十三日に公表された。子規の妹律を「お律さん」「リーさん」と自然にお話になる最後の方であった。松山子規会の会員として貴重な論稿「服部嘉陳あれこれ」（「子規会誌」八号、昭和五十六年一月）を寄せられた。渡部平人氏の本年三月例会発表、大原家と小山家との縁戚解明を一番楽しみにして下さっていた方である。訪問打診のご返信がなかったのも道理であった。子規がお世話になった常盤会寄宿舎の写真がある。この写真は、常盤会寄宿舎の初代監督であった御祖父服部嘉陳先生所蔵のものであった。講談社版『子規全集』刊行に際し、編集に当たられた御父服部嘉香先生の提供により、知

られることとなった。常盤会寄宿舎の二階北側にあった子規の部屋が前面に写されている唯一の写真である。筆者の『正岡子規入門』（思文閣出版、平成五年）発刊のとき、本写真の掲載をお願いすることで、嘉修先生にご縁を頂いた。子規を励ました服部嘉陳先生（号は楠谷）のお墓は、松山城を遠望する龍穩寺にあり、先日お参りしたばかりである。嘉修先生は、服部家の嗣子として、父祖三代に及んで、子規の親類である、藤野、服部を継承され、資料の整理と意義付けに心を注がれたのであった。御父服部嘉香先生は、新体詩詩人、歌人であり、書簡文研究の文学博士であった。そして、早くに世を去った藤野古白の従兄弟であることも、子規と古白とが従兄弟であるために「背中合わせの従兄弟」と称しておられたが、それに倣うと、子規と嘉修先生とは「背中合わせの従兄弟半」ということになる。嘉修先生は、子規との縁を大切にされ、生涯に及んで子規の顕彰に努め、地味ながら着実に、実証的に子規の研究を進められた。数多くの論及が未発表のまま、遺されてい

る。そして、子規の新発見の短歌を発表されんとして逝去されたことは、いっそう心残りであつたに違いない。

嘉修先生の著に「藤野三兄弟」がある。「子規博だより」に、平成四年三月より平成九年六月まで十一回連載された。藤野与五郎の長男藤野正啓（海南）、次男服部嘉陳（楠谷、藤野を出て服部を継承）、三男藤野漸（洋々）の三兄弟である。幕末より明治に至る激動の時代を、資料を基に丹念に論述された。この論稿は、いわば、子規を育てた人々の歩みでもあつた。初めて公開された数多くの写真とともに、資料の一点一点が生きたものとして、語りかける珠玉の論集であり、後世に遺る素晴らしい記録となつてゐる。

嘉修先生は、筆者が世田谷のお宅に参上したときに、一枚の反古に記された子規の歌稿を示された。

「ちりのこる一重桜は色もなく おそきさくらはまださかぬなり」

一重桜に子規自身を、遅きさくらに、これから世に出るべき古白を暗示した歌である。嘉修先生の注記には「子規が古白遺稿（明治三十年五月刊行）を出版した折の叔父藤野漸に会計報告を書き、箱に入れて持参した中に入つていた子規の歌なり。後年、漸は、この半紙の歌を娘節子（村尾）に与えていたが、後、節子は従弟の服部嘉香（嘉修先生父君）にこれを贈つたもの。嘉香はこれを封筒に折つて入れ、書棚の引き出しに入れ、封筒の表に「子規親筆」と

小さくメモ書きしたが、その後、何十年も経ち、その間、虫などに喰われて見失つていたので、嘉修が嘉香の死後発見したのも也。入手の経緯については嘉香より生前嘉修は聞いていたのである」と添え書きされた。嘉修先生は、本稿や、服部嘉香先生著の『子規と古白とその一族』（未刊）を編集され、発表のおつもりのまま他界された。

ドラマ「坂の上の雲」で子規が登場するのを楽しみにし、親類でなければ話せない、子規とその周辺の人々の、言わば、秘話を語ることでできる方であつた。「お律さんは、なかなか理論派でして」、「父が日本橋の浜町で生れたものだから、ハマちゃんと呼ばれたりしましてね」、「父は子規の従兄弟古白の訃報を聴いたのを覚えていましたね」、「安倍能成先生とは親しくて」と、まさに子規が隣に生きてゐるかのように語られた。いわば最後の子規親類の継承者であつた。埋めることのむつかしい歳月を、少しずつ語り始めてくださったその最中に、嘉修先生は子規のもとに翔け上がつて逝かれた。限りなく深い悲しみの気持ちを抱きながら、嘉修先生が、地道に積み上げられ、語りかけて下さつた一言一言を噛みしめつつ、及ばずとも、先生の遺志を継承する責務を痛感する次第である。合掌

書評 山上次郎著 『子規の書画』 新訂増補版 (二玄社刊)

編 集 部

待望の山上次郎先生の『子規の書画』が世に出た。初版刊行から言えば三十年が経過している。その間「なじみ集」など、新しい子規資料の発見が報じられたが、子規の遺墨を正面から論じた書といえ、本書がもっとも手近な書になる。山上次郎先生には、大著『子規遺墨』三卷六冊、書

跡編、絵画編、書簡編があるが、そこに漏れた、大著以後の、主要な遺墨も集成されたところに、本書の大きな意味がある。

本書に詳述された子規遺墨の大半が、子規の病床で書かれたものであることを知ると、何ともいえない感動の息吹が本書から流れ出てくるに違いない。松山子規会の理事としてご尽力いただいた、山上次郎先生は、歌人として、齋藤茂吉、佐藤佐太郎を師と仰ぎ、作歌活動を通じて子規に至り、子規の遺墨を通じて、生涯に及んで、子規との対話を続けられた。

山上次郎先生のお手元に本書が届くのは、三月となった。惜しい哉、先生は三月十四日永眠された。享年九十七歳、

満九十六歳の大往生であった。生涯が現役であり、歌を詠まれた。今春、松根夫人との合同歌集『銀杏』が出版され、祝福された直後のことであった。

子規遺墨の例、挿図123「人物図評」310pには、碧梧桐の加筆にて「正岡子規戯墨 碧題」として、右手より

「日南」煉瓦造りの煙突とから煙、三階建ての家「細工場」

「鉄巖」煉瓦造りの煙突、煙出ず、三階建てに見える家

「坂東」単なる煙突と五箇所から煙、三階建ての家

「川ナベ」極小の煙突三四本から煙、極小の三階建ての家

「飄亭」噴出口の大きい煙突から煙多大、家なし

とある。五百木飄亭の回想「我が見たる子規」(「日本及日本人」子規居士三十三年記念号。昭和九年九月十五日)に

もう大分晩年になつてからの話であらう、正岡が「日本」の同人の中で、末永鐵巖、坂東太虚、吾輩の三人を評したことがあつたさうだ。之を工場に譬へて見ると、末永

の工場は大きな煙突から盛んに煙を吐きつつある。併し中には機械も何も無い。ただ煙が盛に上がるだけだ。我

輩の工場は、機械だけ少しはあるが、あまり沢山は整つてゐない。が、これも煙突の煙は盛に上る。然るに坂東に至ると、中の機械は実によく具備整頓してゐるが、煙は一向に上らない、といふのである。これは吾輩が直接聞いた話ではないが、なかなかよく穿つてゐる。正岡の此種の批評にはなかなか肯綮に中つ（ママ、あたる）、傾聴すべきものが多かつた。

と述べる。貴重な掲載の一例である。

新訂増補版が刊行されるに当たつては、著者山上次郎先生の地元である四国中央市土居町の方々のご尽力があつたことが特筆される。編者和田克司氏の「あとがき」には「土居短歌会第三代会長高橋寿々子氏、事務局加藤敏史氏の協力を得た」と見える。初代会長である山上次郎先生の健康を氣遣いつつ、高橋寿々子会長を中心に土居短歌会の皆さんが山上次郎先生の著書を大切に思い、新訂増補版刊行に当たつても細心の注意をもつての協力を惜しまれなかつた。

山上次郎先生の逝去に際しては、中国湖北省黃岡市東坡赤壁管理処から松根夫人宛に弔電が届けられ、元黃岡県人民政府顧問で黃岡市老年書画協会副会長の劉積群氏を初め、山上次郎先生の友人である夏雲飛・陳朝葵・童懷章・白戰存・龔群夔・程菊仙・王紹成・易亭の各氏から、それぞれ深い悼念を込めた漢詩が贈られた。劉積群先生と現在

も深い交流のある高橋寿々子会長が山上次郎先生の逝去をお知らせし、劉積群先生から各氏にご連絡いただいたのである。

寄せられた詩文は全て加藤敏史氏によって日本語に訳され、山上次郎先生の交友が海外にも及んでいたこと、その顕著な功績が中国でも周知の事実であつたことを人びとに紹介された。

こうして、山上次郎先生の地元土居町においては、先生を敬愛する方々の全面的なご支援により本書は益々多くの読者を獲得していくことと思われ、それを受けて更に広範囲の、山上次郎先生と子規を敬慕する人びとや研究家にとつて必読の書となり、読み継がれていくことが期待される。



書評 谷光隆著 考証『子規と松山』（シード書房刊）

『子規と松山』に見る資料への眼

和田 克 司

『考証 子規と松山』は、著者谷光隆先生の畢生の名著であり、本書を凌駕する類書の刊行は、出版事情至難の時機にあつて、今後不可能と思われるものである。

先生は、奈良女子大学教授、愛知大学教授として生涯に及んで中国史を専攻され、数多くの著書を出版された上に、松山子規会に所属し、子規に関わる、長編の論考を数多く披瀝された。その分野は、子規に関わる漢詩文、子規墓碑銘、松山藩先儒研究と広く、ひいては、松山子規会に関わる諸研究が、先生の大きな遺業となった。

先生が入手された新聞「日本」は、明治二十七年十月三日より、二十八年七月十三日までのものであつた。原本たる「日本」が、きわめて入手困難な中であつて、よくぞ原本が手元に入ったことよと思われるが、先生は、早速、同紙を閲読されて、「側面観子規従軍史」として、正面より新聞「日本」を取り上げられた。

その間の論及で注目されるものの一つが、不折の挿絵にある金州城の城壁図、図版番号32「嗚呼金州半島（大連灣柳樹屯）（不折画報）」である。金州城城壁の南西部角を左手に、中央に金州城南門を描き、その右手に門壁をあしらつて、右手に「大和尚山」と注記して、山を黒く描いた図である。本論考の初出は、「子規会誌」百十一号、平成十八年十月であつた。

デッサン風の写実性を備えた図柄であるが、不自然なのは、城郭の上を歩く二人の人物の姿がバランスを破るほどに大きく意図的に描かれていることである。そしてこれは、私見によれば、子規と不折の姿を描いたものに相違なく、この部分は一種の寓意性を備えた図柄であると思われる。（本書441pから442p）

新聞「日本」原本のもつ強みで、現今のマイクロファイルの映像や、焼付け縮小版では理解できない細部の検討が原紙でなされたのであつた。この指摘は、正しく子規と不折とが城壁上を散策する姿を、金州城のスケッチに組み入れて、不折が描いたものであつた。

人物を点描し、子規を描くことは、すでに、「王子紀行」

(明治27年8月28日「日本」)に、その例がある。そこでは、滝の川橋上の、鳴雪、子規を峻別し、欄干に凭れているのが子規と判明できるほどに、不折の描写は明晰であった。先生が指摘されたように、まさに、本図は、不折が子規と自身とを描いた図である。

現今見られる「日本」は完全には揃っていないが、先生ご所蔵の「日本」で、あるいは欠落部が補えるかもしれないという期待もある。先生の語りかけられた課題は、本書の内容に止まらず、資料の面からも限らない。

## 『子規と松山』への感謝

渡部 平人

著者の谷光隆氏は、「略歴」によれば1920年松山市のお生まれ。1949年京都大学卒業、在学中に東洋史を専攻された。「子規研究は、故渡部勝己教授との出会いに端を発し」「漢詩と郷土史の交錯するところに生じた産物」と「あとがき」に見える。この一書にて、著者の学問的な厳密さ、資料渉猟の広汎・緻密さは十分に推察することができる。

本書は、研究書として類を見ない1000ページ近くの

大部の著である。論考の多くは、著者が松山子規会の会員として「子規会誌」に寄せられた旧稿に補訂を加えたものとされる。

製本が堅牢しかも印刷鮮明で精度が高く、巻末に綿密で懇切な索引が付されていることも、利用者に裨益すること多く極めて有り難い。製本までの過程で、印刷校正等に幾多の時間と丹念な作業を伴ったと思われる、出版社の誠心誠意のご尽力を多としたい。

本書の前半は、子規に直接かわる論考で、「藩公先師篇」及び「文徳顕彰篇」が後半を占める。

「藩公先師篇」第四章「武知五友評伝資料」では、七種の評伝の比較検討に続いて基本的な資料としての墓碑銘に関する考察があり、伊予市榮養寺に建立の武知五友の墓碑銘が掲げられ詳細な註が付される。さらに、日下伯巖、大原觀山、河東静溪、正岡子規を初めとして関わりのある人びと及び五友自身の詩文、八種の印章、「如鏡稿」所収の漢詩等の資料五十種余りが引用され、五友の人物像が浮彫にされている。多様な資料が綿密に関連づけられ一挙に示されており、読者・研究者にとって便益性が極めて高い。

第六章「雲林遺稿選釈」においては、現状では未開拓の点の多いこの分野について、子規との関係の立場からの鋭い考察が多数含まれている。雲林邸の庭園に関する考察においては、池と泉の違いを検証し、明治以降の市街図によつ

て水流の状況を丹念に辿るなどの周到さである。正岡子規との深い関わりを示す詩文等の解説評釈が施される。更に、雲林の撰文による服部楠谷の碑銘の検証、「哭服部楠谷兄」等の詩文の評釈は新鮮であり出色である。

著者の個人蔵を含め多数の資料を駆使し、至れり尽くせりの詳細な注記を付しつつ、冷静且つ論理的な筆致で雲林の人となりを描き出されており、その鮮やかさに目を見張る思いである。

本書は、著者の長年に亘る探索と研鑽の実績に基づく格調高い労作であり、今後の子規研究のために貴重な文献資料が提供されたと思われ、改めて著者及び発行者に深甚なる謝意を表したい。

## 子規研究と郷土愛

今村 威

谷光隆氏は、晩年奈良にお住まいであった。常々、松山へ行くことを「松山へ帰る」と言っておられたそうである。「付録」の「思郷」や「あとがき」には、松山で過された少年時代の事が、まるで昨日のこのように、鮮明に記されている。

「子規会誌」に初めて寄稿されたのは、三号（昭和五年一〇月）の「新たに発見された正岡子規の漢詩稿について」である。以来、全四八回にわたって寄稿されており、それらの論文は総て『子規と松山』に収められている。松山子規会に寄せられていた並々ならぬ愛情の深さが知られる。中でも印象深いのは、五回にわたって寄稿された「子規の神道碑銘に見える『御馬廻加番』について」である。子規が、少年時代河東静溪塾で学んだ『唐宋八家文』の中の「瀧岡阡表」をモデルに、父母への孝養の心を込めて作られたものと結論づけられている。それは、父の役職を、本役ではなく、臨時に命じられた、より格の高い「御馬廻加番」を用いているところに表れていると論じられている。この論文の中で、子規の父隼太が御馬廻に加えられたのは、黒船来航の世情に対応したものであること、また松山城の古地図により、馬廻番所が、三ノ丸から二ノ丸に通ずる入口である槻門にあり、そこは二ノ丸の外郭でもっとも重要な構えのあった所であるなど、周辺の事柄についても詳細に述べられていて、得るところが大きい。子規自作の墓碑銘が、父母への思いに発しているという新しい説の根底には、やはり谷氏の故郷松山への思いが作用しているように思える。



# 考証『子規と松山』目次 抜粹

## 第一部 詩稿発見篇

第一章 無署名子規漢詩稿の考証と断定

第二章 無署名子規漢詩稿の梗概

第三章 「柿くへば」前後の正岡子規

—新発見の漢詩稿を中心として—

第四章 子規の漢詩

第六章 明治二十八、九年における子規の漢詩

一 明治二十八、九年の詩数と詩体

二 子規身辺の事情 1 従軍 2 還郷

四 子規と寒山詩・正岡行

## 第二部 神道碑銘篇

第二章 歐陽脩の瀧岡阡表と正岡子規の大龍寺阡表

第三章 處之助と常規

第四章 子規の通称「升」の卦義

第五章 漢詩稿所収「子規」詩考釈

第六章 「瀬祭書屋」探源

第七章 伊豫松山と東京根岸

一 伊豫松山 1 湊町四丁目

2 明治十年代、二十年代の松山

二 東京根岸 1 鷺横丁 2 回想の根岸と子規

第九章 御馬廻と御馬廻格と御馬廻加番

二 幕藩体制下の俸禄制より見た御馬廻の地位

三 松山藩における馬廻組の構成

第十章 日清戦争期における日本新聞の報道と論説

—側面親子規従軍史—

一 戦争経過の概要 3 子規従軍の動機

五 日清講和条約と三国干涉

3 子規および諸家・諸新聞の李鴻章評

## 第三部 藩公先師篇

第一章 藩校の館名と「明教」の出典並に其の意味

第三章 大原觀山の文集と筆記

第四章 武知五友評伝資料

第一部 二 旧松山藩臣清風武知先生墓碑銘

第五章 河東静溪遺珠解説

第六章 雲林遺稿選釈

第八章 明治三十年の内藤素行書簡—浦屋寛制宛—

## 第四部 文徳顕彰篇

第一章 「巖尾道人」小考

五 子規と老莊思想

第二章 華山の蓮の花剪らましを

第三章 蝦茶袴の運動会

第四章 「野球姿の子規」の写真

第五章 森次太郎著「米国の家庭及社会」抜粹

第六章 松山子規会初代会長菅 菊太郎先生

〔付録〕 思郷

喜田 重行氏 松山子規会理事として、長らく本会を支えてくださった喜田重行氏が、去る四月一五日逝去された。享年八四歳であつた。喜田さんは、本会理事の外に、前子規記念博物館協議会会長を務められ、晩年を子規の研究、顕彰に捧げられた。『子規点描』『子規交流』の二つの著書があり、前者は、一九九六年の愛媛出版文化賞を受賞している。喜田さんは、子規を「俳聖」とか、松山を「俳都」とか呼ぶのが嫌いであつた。『子規点描』の第一章「骨肉の愛」は、明治二五年五月五日の碧梧桐宛の子規の手紙から始まる。喜田さんはその中にある、子規の「偏狂とまがうばかりに強烈な身内意識」を指摘し、司馬遼太郎をして「日本最大の教育者は子規」と言わしめた根源が、ここにあると言われるのである。そのことを、弟子に宛てた諸々の手紙で実証しながら、読者を同感させてゆく手法には、元NHK（松山放送局副局長）に勤務された、ジャーナリストとしての面目躍如たるものがある。きれいな事ではない、血の通つた子規を愛されていた。昨年『子規交流』を出版された際、「子規会誌」で、「喜田さんは方寸に子規庵をお持ちのようで、子規と喜田さんとの清談を聞く思いがする」と紹介したことを、たいへん喜んでくださった。ご自身が井手会長に電話されて、五月例会での講演を希望されていたのに、突然の訃報は、残念でならない。

門田 圭三氏 四月二七日、九六歳の天寿を全うされた。会員として松山子規会をお支え下さつたことに、心から感謝申し上げたい。

一九三八年東京朝日新聞に入社され、戦争末期には、内閣付きの記者をされた。四国電力から南海放送へ移られ、社長、会長、常任相談役として、県内のみならず、全国の民間放送の発展に寄与され、民間放送連盟理事もお務めになつた。六六年愛媛経済同友会を発足させ、六九年代表幹事に就任されるなど、愛媛の文化、経済の発展に寄与され、九五年愛媛県功労賞、〇二年愛媛新聞賞を受賞された。

今から約二〇〇年前の風早の俳人門田兔文は、門田さんの祖先に当たる。小林一茶と親交があつた。一茶の『西国紀行』で、「(兔文と)歌仙満巻して」と書かれている歌仙連句が、以来長らく不明であつたのを、門田さんは、長年にわたつて求めておられた。二〇〇〇年に長野県山ノ内町の湯薫亭（一茶の門弟湯本希枝の庵）でこれが発見され、『湯薫亭一茶新資料集』に収められて、〇八年松山へも伝えられた。門田さんは長年の夢がかない、早速兔文の句からとつて名付けた『花の旅かさ花なれや』を出版して、その内容を紹介された。しかもその年が、兔文の二百回忌に当たっていたのも、門田さんのご人徳の然らしむる所である。

門田さんはクラシック音楽を愛しておられた。葬儀に先立ち、式場にモーツァルトのレクイエムが流れていたのが印象的であつた。

# 平成二十年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

## ○正岡子規

### ●単行本

俳句の発見 正岡子規とその時代 復本一郎 日本放送出版協会 平成十九、十一、二十五

正岡子規 斎藤茂吉(新しい短歌観賞2) 内藤明、安森敏隆 晃洋書房 平成二十、四、十

正岡子規研究 子規研究会の会 平成二十、六、十  
 ことばで織られた都市 君野隆久 三元社 平成二十、六、二十

漱石と子規の漢詩―対比の視点から― 徐前 明治書院 平成十七、九、二十五

子規365日 夏井いつき 朝日新聞出版 平成二十、八、二十

### ●論文

子規と霽月 2 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十、一  
 子規、最後の八年 12〜22 関川夏央 「短歌研究」 平

成二十、一〜十一

「子規」私記 55〜60 伊吹純 「幻桃」 57〜62

正岡子規の生涯と俳句革新 9〜20 佐々木建成 「天

穹」平成二十、一〜十二

子規の俳句 94〜96 中川みえ 「春星」 平成二十、一

〜三

子規深展 81〜92 山下一海 「未来図」 平成二十、一

〜十二

子規の「切字」論と、その流れ 33〜44 復本一郎 「若

竹」平成二十、一〜十二

エッセイストとしての子規 12、最終回 永田圭介 「若

ぎおん」 60、61

「水魚」のことから 84〜95 岡本八千代 「三河アララ

ギ」平成二十、一〜十二

子規・虚子周辺 28〜31 平岡まさる 「花みかん」 29

〜32

子規の俳論俳話 1〜7 中川みえ 「春星」 平成二十、

四〇十

正岡子規と万葉集 4、5 片山武 「子規研究」 58、59

『散策集』注釈 3、4 「子規会誌」 117、118

子規の風・子規からの風 1、2 青木亮人 「子規新報」 139、140

正岡子規と俳句 1、2 橋本直 「ユーキャン俳句倶楽部」 平成二十、九、十一

写生文の誕生 1、3 志鳥宏遠 「花鳥諷詠」 平成二十、九、十一

俳句とともに 子規庵保存会のみなさん 「俳句春秋」

114 特集・正岡子規・一日一日が絶筆 「月刊絵手紙」 平成二十、五

石井露月と正岡子規 和田克司 「俳星」 平成二十、一

子規の旅 宇和宣 「子規会誌」 116

子規の「写生」の正確さについて 復本一郎 「鬼会報」 130

大特集 本当に名句? 「俳句」 平成二十、二

子規博より 渡部光一郎 「子規新報」 135、140

創刊号物語六 ホト、ギス(東京版) 火箱游歩 「船団」 76

えひめ文学館21 正岡子規『散策集』—子規が最後に歩いた松山 池内恵吾 「文化愛媛」 60

石井露月の子規観 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十、四

「俳諧評判記」一件 復本一郎 「鬼会報」 133

子規と松山にかかわる俳句 和田克司 「子規会誌」 117

芥川龍之介と子規の意外な関係 復本一郎 「鬼会報」 135

正岡子規のジャンル意識—西洋受容と写生論構築— 松井貴子 「文学」 平成二十、七、八

子規の短歌観—子規のよしとする歌を中心に— 忽那哲 「子規会誌」 118

飄亭宛子規書簡の異文の全貌 復本一郎 「鬼会報」 136

子規の工場の譬喩の人物二名判明!! 復本一郎 「鬼会報」 137

名船発掘 日本「海城丸」正岡子規が日清戦争の従軍記者として乗船 山田廸生 ラメール 192

正岡子規の「国事俳句」 立川淳一 「子規研究」 59

「子規の旅」俳星見染塚始末の顛末 宇和宣 「泉」 平成二十、十

韓日文化交流と子規—二〇〇七韓日文化交流セミナー— 朴智暎 「子規会誌」 119

講演「子規と近代俳句の確立」—その保守的性格面よりの考察— 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十、十一

正岡子規と文学の革新 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十、十二

金子兜太と正岡子規 復本一郎 「國文学」 平成二十、十二 臨時増刊号

子規の憤懣—近藤泥牛編『新派俳家句集』をめぐって—  
復本一郎 「文学」 平成二十、十一・十二

### ○夏目漱石

#### ●論文

『坊っちゃん』原稿を読む 7 佐藤栄作 「松山坊っちゃん学生会報」 7

夏目漱石『野分』の位置—一人称から三人称への階段—  
矢田純子 「国語と国文学」 平成二十、九

漱石と落語—「二百十日」を中心に 小川隆夫 「國文学」 平成二十、六

『坊っちゃん』自筆原稿を読む楽しみ 佐藤栄作 「文化愛媛」 60

内田夕闇と夏目漱石 加藤謙吉 「日本歴史」 平成二十、四

特集 漱石 「國文学」 平成二十、六臨時増刊号

漱石と安倍能成 中根隆行 「松山坊っちゃん学生会報」 7

『坊っちゃん』の読み方……多田満仲伝承として読む 山影冬彦 「松山坊っちゃん学生会報」 7

鴨川を隔てて—漱石と多佳女— 杉田博明 「京都漱石の會」 2

漱石から—草亭にいただいた書画 西川弥子 「京都漱石の會」 2

夏目漱石の岡山逗留 横山俊之 「京都漱石の會」 2  
漱石の女弟子 藤浪和子 丹治伊津子 「京都漱石の會」 2

### ○高浜虚子

#### ●単行本

知られざる虚子 栗林圭魚 角川学芸出版 平成二十、四、八

#### ●論文

虚子百句 15~20 小西昭夫 「子規新報」 135~140

虚子を読むⅡ 3~5 櫻片真王 「若葉」 平成二十、二、四

虚子への道 6~9 本井英 「夏潮」 平成二十、一、四

虚子句碑を訪ねて 補遺 8 「花鳥諷詠」 平成二十、六

虚子連句論序説—子規生前の虚子の連句論 復本一郎 「鬼」 22

○河東碧梧桐

●論文

河東碧梧桐の軌跡 1、2 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十、五、七

露月山廬保管河東碧梧桐の書翰について 1、2 長谷部清一 「俳星」 平成二十、二、九

河東碧梧桐編集の「ホトトギス」 復本一郎 「鬼会報」

132

碧梧桐の子規俳句批判 復本一郎 「鬼会報」 134

碧梧桐を通して見た沖繩―『続三千里』とメディアから

― 三浦加代子 「俳句文学館紀要」 15

○その他

●単行本

秋より高き 晩年の秋山好古と周辺のひとつと 片上雅仁 アトラス出版 平成二十、七、十四

陸羯南 自由に公論を代表す 松田宏一郎 ミネルヴァ

書房 平成二十、十一、十

●論文

伊予俳句八十八か所番外編 18、19、最終回、掲載一覧

「泉」 平成二十、一、四

子規門下の医師露月 1、2 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十、二、三

現代俳人列伝 100〜110 「鷹」 平成二十、二、十二

鼠骨の寸鉄 続驚きのえひめ古典史20 福田安典 「子規新報」 137

内藤鳴雪の生涯―子規との関係にふれて― 畠中淳

「杜鵑花」 平成二十、八

近代教科書と俳句 綿拔豊昭 「軸」 平成二十、九

編集の都合により遅くなりましたことをお詫びします。

子規会誌 第二二六号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成三年七月一九日

発行所 松山市子規会

松山市末広町正宗寺内

振替口座 〇一六二〇一七一八六八

印刷所 ㈱二葉印刷所

電話 〇八九一九五〇三三八

# (有) 二葉印刷所

渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL(089) 925-0338  
FAX(089) 925-2189

松山を代表する

## 銘菓「子規」・醤油餅

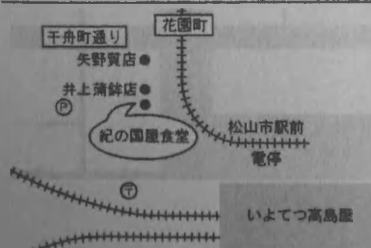
松山市道後湯之町13-7

### 巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

お食事処・麵処・宴会 (20名様)

## 紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、  
ふぐ会席、猪鍋  
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5  
電話 945-1309  
(日曜 定休日)

# 子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット  
定価 58,800円



【編集委員】

栗津則雄／大岡信／長谷川耀／和田克司

四六判 上製・カバー装(各巻368頁～768頁) 定価 3675円～3990円 装幀 菊地信義

本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマとしての新しい編集
- 新字・新かな表記 漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられ、るようになした。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の 充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

〔全15巻内容〕

- 第1巻 子規の三大随筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と静岡

【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17  
TEL 055-973-7117

Z-KAI

<http://www.zkai.co.jp/>

心を  
ゆるめて  
ゆつたりと

旬味あふれる会席をたのしみ  
あふれる湯にお遊びください。

道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707  
予約専用 ☎089-941-7782(8:45～20:00) ☎0120-10-4848(8:45～20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

¥400